

生存科学研究ニュース

VOL.26, No. 2 2011.10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1

電話 03-3563-3518 FAX 03-3567-3608

Eメール seizon@mx1.alpha-web.ne.jp

Web address <http://w1.alpha-web.ne.jp/~seizon>

新役員のご紹介

平成23年6月より役員が改選され、新しい執行部によって、平成23年度の事業は実行されることになりました。本年度は公益財団法人への移行申請を行う予定もあり、全員一層心を引き締めて、運営に当たりたいと考えております。

理事長

青木 清 上智大学生命倫理研究所所長・人間総合科学大学副学長

副理事長

松下 正明 東京都健康長寿医療センター理事長

専務理事

高木 廣文 東邦大学看護学部長

常務理事

大槻 磐男 九州大学名誉教授・東京慈恵医科大学客員教授

大林 雅之 東洋英和女学院大学教授
津谷喜一郎 東京大学大学院薬学系研究科特任教授

藤原 成一 日本大学芸術学部講師

理事

小泉 英明 (株)日立製作所フェロー

小島 静二 小島歯科クリニック院長

鈴木 雪夫 東京大学名誉教授

府川 哲夫 特定非営利活動法人福祉未来研究所代表

丸井 英二 順天堂大学医学部教授

監事

小川 春男 亜細亜大学学長

神谷 恵子 弁護士

評議員

石井 威望 東京大学名誉教授
伊藤 正男 理化学研究所脳科学総合研究センター特別顧問

辛島恵美子 関西大学社会安全学部教授
川崎 富作 日本川崎病研究センター所長

高瀬 淨 秀明大学名誉教授

田中 慶司 東京医科大学理事長

藤井 充 山梨県峡東保健福祉事務所副所長

真崎 知生 京都大学名誉教授

御子柴克彦 東京大学名誉教授・理化学研究所 BSI チームリーダー

村上陽一郎 東洋英和女学院大学学長

理事長就任に当たって



このたび伝統ある財団法人生存科学研究所の理事長に就任いたしました青木清です。

前理事長の大塚正徳先生の退任に伴って本年の6月1日より理事会の推挙の

もとに選出されました。この時期は日本政府の意向もあって、これまでの財団法人が公益財団法人あるいは一般財団法人に移行し、内閣府の認定を受けるときでもあります。

本研究所は、設立者の故武見太郎先生の理念に基づいて、公益財団法人として今後も活動することを選択して、その申請を内閣府にしています。認定を受けるためには、これまでとは

第15回「元気と病気の間」研究会



表記研究会は、「養生の思想—元気と病気をつなぐ—」と題し、2010年12月16日(木) 18:00 から、茨城大学教育学部養護教諭養成課程教授の瀧澤利行氏による発表と議論が行われた。

瀧澤氏は、養生とは何か、日本における養生論はどのように変遷してきたかを説明した後、現代における養生の意義と将来の可能性について展開された。

養生とは、中国および朝鮮、台湾、日本の極東アジアの文化的環境の下で形成された無病長生のための思想と方法であり、すすんで精神的修養や人間形成のあり方を示すところに特徴がある。この思想・方法が生まれた背景には、道家思想、神仙思想、道教文化、儒教思想等がある。したがって、単なる健康法にはとどまらず、いわば人の道に規定された生の様式である。また、心を養う(養神)のが養生の最終目的であるが、そのためには身体を養う(養形)必要があると説くので、単なる精神論でもない。

日本における養生論には、近世前期から近世後期にかけて変化がみられると瀧澤氏は指摘する。貝原益軒『養生訓』(1713)や竹中通菴『古今養性録』(1692)にみられる前期の養生論は、封建体制・文化の確立期という要請を受けて、体制的価値への適応があり、武家的な忠孝や節制と共鳴した生産的身体や蓄積的生活が重視されている。

それに対し、後期すなわち封建体制・文化の動揺期に入ると、体制的価値からの相対的離脱と庶民的文化世界の形成により、抑制すべきとされた欲望が部分的に肯定され、規範の寛容化が起こる。養生論の担い手が武士階級から識字庶民階級へと移ったことにより、消費的身体・周遊的生活が求められるようになった。いわば脱体制的庶民的健康文化としての養生であり、その論調は、鈴木胤『養生要論』(1840)や水野澤齋『養生辨』(1842)にみられる。

明治時代に入ると、近代的健康管理技法としての西欧衛生学が導入されたことで、自己への配慮から社会への配慮へのシフトが起こる。すなわち、「養生」論の「衛生」論化であり、養生論の中で、外的環境の記述が増え、修養的な記述が減った。ここで「衛生」とは、社会の健

少々異なる活動方針を示さなければなりません。この大事な時期ですので、本研究所の公益法人としての存続をはかるべく、誠心誠意、理事、評議員の皆様の協力を得ながら努力する所存です。

生存科学についての武見太郎先生の理念は、私が述べるまでもありませんが、ここにあらためて紹介しておきたいと思います。それは、「人類の『生存』という概念を基点とし、科学技術を中心に社会科学、哲学など凡ゆる学問の成果を集結して「生存」の形態・機能をマクロ・ミクロの両面から探求し、それらを総合的に把握する新しい生存科学を創立確立することが必要である」ということです。

20世紀(1979年)の後半に設立された本研究所の設立趣旨は、21世紀になった今日でも我が国だけでなく世界の発展国にも求められている考えでもあるといえます。

これまで研究所の歴代の理事長や理事、評議員をはじめとして、それに生存科学研究会に参加してこられた多くの会員の方々によって、人類の健康な生存基盤や健康政策を樹立するために活動してまいりました。これら活動の記録は本研究所の学術雑誌である「生存科学」A・B(年2回)に掲載されてきました。これら雑誌も22巻になろうとしています。それらは本研究所の活動の歴史でもあります。現在は世界的な経済的不況を受けて経済面で苦しいところもありますが、本研究所に係わる方々は手弁当でも生存科学の掲げる理念を確立すべく、研究に励んでいただけるものと信じています。

このような次第ですが、私は微力ではありますが、本研究所が今後公益法人としての役割を、武見理念に基づいて十分に果たすべく皆様と連携して発展させる所存です。何卒、ご協力のほど宜しくお願いします。



第16回「元気と病気の間」研究会

康化であり、強い近代国家を形成するための手段の一つとして利用された。なお、すでに近世末期に水野澤齋『養生辨』は、自己の心身の内的充実である「内養生」と自己と環境との関係論における自己防衛である「外衛生」を対比して論じていたので、養生概念は明治以前に分節化されており、受け皿は用意されていたといえる。

大正時代に入ると、養生概念は復権の兆しをみせる。有閑階級の健康保持の理念として（柳田国男の養生階級説）、あるいは非西洋的保健医療文化の集積的概念として、かつての養生が見直されるのである。結果として、養生は、種々の補完代替医療の健康観の基礎としての役目を担わされることになる。ひいては、近代西洋医学への対抗文化としての意味合いを有するようになるのである。

以上の変遷をたどると、現代における養生には、自己管理や予防医学を支える理論基盤としての意義や、正統・主流への文化的な対抗装置としての意義が見出せる。さらに今後は、身体、生活、人間性、そして社会をその内発的な作用を最大限に生かしながら「やわらかく」修復していく文化的技法としての養生の可能性が考えられる。

その後の議論では、養生概念は、かつて全体主義的な政策を後ろ盾した近代的な健康概念へのカウンターカルチャーになりうるとの意見が出た一方、養生概念自体も、精神的修養の規範化や自己鍛錬などを通じて全体主義に傾斜する可能性があるとの意見が出た。さらに瀧澤氏は、養生には、自分の身体を良くしていく技法という内に向かう側面と、一人ひとりが良くなることで全体の環境を良くする文化という外に向かう側面の両義性もあると述べた。また、芝生やコンクリートを固めることを「養生する」と表現するのは、体をうまく安定させて形になるのを待つという意味で共通しており、家具を運ぶ際に傷つけないよう毛布で包むことを「養生する」と表現するのは、自分の身体に対する外からの侵害を防ぐために気をつけて備えておくという意味で共通していることが補足説明された。さらに、中国の養生と日本の養生の違いについても議論がなされた。

（文責：長澤道行，津谷喜一郎）



表記研究会は、「近代的身体概念のイデオロギー分析」と題し、2011年2月3日（木）18：30から、北海道教育大学釧路校准教授の北澤一利氏による発表と議論が行われた。

北澤氏は、何をもって健康と呼ぶかはその時代の価値観や文化的・社会的・歴史的な文脈に依存して変わるという立場の下、「健康」という言葉の起源について調べ、それが日本人の身体観およびその実践法の変遷とどのように対応しているかを分析された。

「健康」の発端は、1790年代に当時の日本にはなかった西洋概念を輸入する際、オランダ語の翻訳に迫られて作った言葉の一つである。ただし、当初よりこの訳語に定まったわけではなく、「健運」「健旺」「強壯」「壮健」「健行」なども用いられていた。医学書の中で「健康」が支配的になったのが1850年代、一般にも広く知られる言葉となったのが1890年代である。

では、このように定着していく過程で同時に何が起きていたのか。日本人が描いた人体解剖図の変化に着目すると、この頃に、身体に対する日本人の見方が変わったことがわかる。

江戸時代の解剖図には、経絡やつぼが描かれ、気の流れに注意が払われている。江戸時代も後半になると、実際に解剖をして描いた山脇東洋の『蔵志』（1759）もある。しかし、その後『解体新書』（1774）を出版した杉田玄白が批判したように、『蔵志』の解剖図は漢方医学にとらわれていたあまり、解剖したにもかかわらず臓器の形や大きさ等が直視できていない。それほど、西洋医学を取り入れる前の日本人の身体観には確たるものがあつたといえる。

『解体新書』が出た後、事実を直視することの大切さを知らされた日本人は、忠実な観察に基づく解剖図を描いた。しかしこれらにも、西洋医学の解剖図とは違いが生じた。今度はありのままに描くあまり、重力で垂れ下がった臓器など地面に横たわった死体そのものを描いているのである。これに対して西洋式は、皮膚が透き通って筋肉や血管網がきれいにわかりやすくなるようにポーズしている図である。

当時、日本人に西洋式の解剖図が描けなかったのは、生理学の知識が不十分であったからである。各器官の構造と機能あるいは役割、例えば心臓と血管、肺と気管の関係等の知識が増え

ていけばいくほど、身体を見る目が変わり、その結果目には見えないものを描くことができるようになるのである。解剖された身体が生きていた状態を想像して描けるようになるためには、構造や機能がわかりやすい誇張が加えられた身体観、あるいは機能美や秩序正しさを補正された身体観が求められたのである。

このように考えると、西洋医学が客観的で、漢方医学が非客観的で遅れていたと捉えるのは問題が多いことがわかる。西洋医学は西洋医学としてのイデオロギーを含んでおり、それは漢方医学が漢方医学としてのイデオロギーを含んでいることと同等といえる。漢方医学のイデオロギー性ばかりが取りざたされるのは公平でなく、どちらも同じように客観的事実に対する先入観や理論的修正を含んでいるのである。

また、この身体観の変遷とともに、養生法から健康法へと実践が変わっている。養生は、聖人が定めた行動規範や道徳に従うことで病を遠ざけ、気の保存を図ろうとするのに対し、健康は、生理学的法則を明らかにし、それに従うことで病気を治療・予防する。漢方的身体観に基づく養生は、個人、善悪、動きの質を重視するのに対し、西洋的身体観に基づく健康は、集団、正誤、動きの量を重視するといえる。

その後の議論ではまず、現代人はモダンな健康概念には物足りなさを感じており、個人差を重んじる養生への回帰がみられるという指摘があった。他方で、パチンコに通う若者と図書館に通う若者とは前者を不健康と感じる人がいるように、現在の健康という言葉には、養生の規律・規範的な側面も残っていることが指摘された。西洋式に構造と機能でものを見ると、役に立たなければ切り捨ててよいといった外科的発想に結びつきやすいという意見もあがった。最後に北澤氏は、これからの国家的健康政策のあり方についての問いに、干渉は少なく効果は大きくするのがよいと答えた。

(文責：長澤道行，津谷喜一郎)

平成 24 年度自主研究事業の募集

本研究所では、まもなく平成 24 年度の予算作成作業に入りますので、会員の皆様から自主研究の申請を募集いたします。応募用紙は生存

科学研究所ホームページからダウンロードし、事務局までEメールにてご送付下さい。基本構想委員会、および常務理事会の審議を経て、2月に採用の可否をご連絡いたします。奮ってご応募下さい。

大人の教育としての哲学研究会シンポジウム

生存科学研究所自主研究のひとつである本会は東京大学大学院教育学研究科(1階・第1会議室)にて12月18日(日)に講演会を開催いたします。時間は14:30-18:30です。プログラム及び概要を同封いたしますので、是非ご出席ください。

研究会日報

5月12日	(木)編集小委員会
5月27日	(金)平成23年度第2回理事会・第1回評議員会
5月27日	(金)医療政策研究会
6月2日	(木)口腔システム研究会
6月3日	(金)平成23年度第2回理事会
6月13日	(月)平成23年度第3回理事会
6月23日	(木)編集小委員会
6月24日	(金)医療政策研究会
7月8日	(金)基本構想委員会
7月18日	(月)医療政策研究会
8月20日	(土)臨床倫理指針研究会
8月29日	(月)医療政策研究会
9月2日	(金)常務理事会
9月5日	(月)編集小委員会
9月13日	(火)平成23年度第4回理事会
9月30日	(金)医療政策研究会

編集後記

本研究所のホームページはまもなく簡潔なアドレスに変更されます。お楽しみに。

「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」の施行により、平成25年11月30日までにすべての社団法人、財団法人は移行申請をしなければなりません。本研究所も9月末に公益財団法人への移行申請作業を終えました。結果は年度末までに判明いたします。

国内では東日本大震災とそれにつづく放射能汚染、海外ではニューヨーク ウォール街でのデモ、フランス・ベルギー系大手銀行デクシアの倒産、イスラム諸国の民主化運動と、地球上のいたるところが激震に襲われています。

本研究所も経済状況が悪化する中、舵取りが難しくなってきましたが、会員皆様のご理解、ご支援を受け、この難局を乗り越えてゆきたいと願っております。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。